曲線 I 形ばりの複合非線形問題に関する一解析法

若菜啓孝*•﨑山

毅*

An Analytical Method for Geometrically and Materially Nonlinear Problems of Curved I-girders

by

Hirotaka WAKANA* and Takeshi SAKIYAMA*

In the case of horizontally curved bridge having short span and large radius of curvature, the torsional moments on main girder are small. Therefore, the thin-walled curved beams with open cross sections have been used for structual members of horizontally curved bridges for their rationality and lower cost on the faburication. The problems of the mechanical properties and behaviors of thin-walled curved beams have been studied in consideration of geometrical and material nonlinearities by many researchers.

Previously, we discussed the three dimensional stability problems of steel arches with closed cross sections.

In the present report the authors intend to expand this analytical method for studying the mechanical properties of the thin-walled curved beams with open cross sections. In order to confirm the convergencies and accuracies of the approximate solutions, the results of numerical analysis are compared with the existing experimental and theoretical ones.

1.序 言

本来は、ねじりに対して弱いとされている薄肉開断 面材でも、近年の構造物の軽量化、複雑化に伴い、構 造要素として使用される機会が多くなっている。その ような観点から、はりの弾塑性横倒れ座屈に関する研 究は、多くの研究者によって実験的、理論的になされ、 残留応力や初期変位などを考慮した、より現実的な解 析が提案されてきた.¹⁾⁻³⁾

また,薄肉曲線ばりを構造要素とするような曲線桁 橋の場合,曲率に起因するねじり及び曲げモーメント が生じるため,ねじり剛性の大きい箱型断面のような 閉断面を有するものが,耐荷力は大きい.しかしなが ら,曲率半径が大きい場合やスパン長が短い場合など においては開断面を用いた方が,合理的かつ経済的で あることが知られている.⁴⁵⁵この薄肉曲線ばりの力学

昭和60年9月30日受理

*構造工学科 (Department of Structual Engineering)

的挙動に関する研究も数多くなされ,現在では,幾何 学的ばかりでなく材料的非線形性をも考慮した複合非 線形解析法へと進んでいる.

薄木ら⁶⁾⁻⁸⁾は、非線形のひずみ関係式と応力のつり 合い式を基礎とし、曲線要素内で、座標の3次式で近 似された剛性方程式を導き出し、薄肉線材の微小変位 座屈解析と弾性および非弾性有限変位解析を行ってい る.福本、西田ら⁹⁾¹⁰⁾は、大きなねじり変形での曲線部 材の終局荷重時の挙動の研究を目的とし、両端単純支 持曲がりはりに集中荷重を載荷した耐荷力実験を行っ ている。さらには、曲げおよびねじりモーメント作用 の下での曲線I形ばりの基礎方程式を導き、非弾性域 まで考慮し、伝達マトリックス法を用いて解析を行っ ている。また同様に、伝達マトリックス法を適用し、 曲線I形ばりの耐荷力曲線の性状について、検討を 行っているものに、前川、吉田ら¹¹⁾⁻¹³⁾の研究が挙げら れる。

著者ら14)は、これまでに、材料の応力-ひずみ関係、

部材軸線形状,支持条件などの任意性を考慮し,閉断 面を有するアーチの立体的な複合非線形問題について, 解析を行っている.

本研究は、この複合非線形解析法を開断面を有する 曲線ばりに拡張し、薄肉曲線 I 形ばりの複合非線形問 題に関する一解析法を提案するものである.

本解析における基礎微分方程式は,曲線材の変形状 態における力の平衡方程式および仮想仕事の原理等か ら得られるねじれ率-ねじれモーメントの関係式に増 分理論を適用することにより導き出した.

2. 増分形基礎微分方程式の誘導

曲線部材の変形状態における力の釣り合い条件式お よび仮想仕事の原理等から得られるねじりの微分方程 式に基づいて,有限変形解析における曲線部材の基礎 微分方程式が誘導される.

座標系および断面力の定義を, Fig. 1 に示す.

曲線部材微小要素における変形前後の関係式および 増分理論の応用により、断面力の増分量 $\Delta Q_x \sim \Delta M_\omega$ を規定する増分形微分方程式は、次の7式で表わせる.

$$\frac{d\Delta Q_x}{ds} - \psi_{z0}\Delta Q_y + K_{y0}\Delta Q_z - Q_y\Delta\psi_z + Q_z\Delta\phi_y + \bar{P}_y\Delta\theta_z - \bar{P}_z\Delta\theta_y + \Delta p_x - \Delta Q_y\Delta\psi_z + \Delta Q_z\Delta\phi_y = 0$$

$$\frac{d\Delta Q_y}{ds} - K_{x0}\Delta Q_z + \psi_{z0}\Delta Q_x - Q_x\Delta\psi_z - Q_z\Delta\phi_x - \bar{P}_x\Delta\theta_z + \Delta p_y + \bar{P}_z\Delta\theta_x - \Delta Q_x\Delta\psi_z - \Delta Q_z\Delta\phi_x = 0$$

$$\frac{d\Delta Q_z}{ds} - K_{y0}\Delta Q_x + K_{x0}\Delta Q_y - Q_x\Delta\phi_y + Q_y\Delta\theta_x + \bar{P}_x\Delta\theta_y - \bar{P}_y\Delta\theta_x + \Delta p_z - \Delta Q_x\Delta\phi_y + \Delta Q_y\Delta\phi_x = 0$$

$$\frac{d\Delta M_x}{ds} - \psi_{z0}\Delta M_y + K_{y0}\Delta M_z - M_y\Delta\psi_z + M_z\Delta\phi_y - \Delta Q_y - \Delta M_y\Delta\psi_z + \Delta\phi_y\Delta M_z = 0$$

$$\frac{d\Delta M_y}{ds} + \psi_{z0}\Delta M_x - K_{x0}\Delta M_z + M_x\Delta\psi_z - M_z\Delta\phi_x + \Delta Q_x - \Delta\phi_x\Delta M_z + \Delta M_x\Delta\psi_z = 0$$

$$\frac{d\Delta M_z}{ds} - K_{y0}\Delta M_x + K_{x0}\Delta M_y - M_x\Delta\phi_y - M_y\Delta\phi_x - \phi_y\Delta M_x + \Delta\phi_x\Delta M_y = 0$$



$$\frac{d\Delta M_{\omega}}{ds} - \Delta M_z + GJ \Delta \phi_z = 0$$

$$\hbar t_z^z \cup,$$

$$\bar{P}_x = (p_x + \Delta p_x), \ \bar{P}_y = (p_y + \Delta p_y),$$

$$\bar{P}_z = (p_z + \Delta p_z) \qquad (1.a \sim 1.g)$$

上式において、 K_{x0} 、 K_{y0} は、x、y軸に関する曲 率、 ϕ_{z0} は、ねじれ率であり、 $\Delta \phi_x$ 等は、それらの増分 量を表わす。また、GJは、St. Venant のねじり剛 性、 EI_{ω} は、曲げねじれ剛性である。

また,軸線の伸び率 ⊿ε₀, 曲率の変化量, 曲げねじれ 率および変位に関しては, 次の関係式が成り立つ.

$$\begin{aligned} \Delta \varepsilon_{0} &= \frac{d\Delta u_{z}}{ds} - K_{y0} \Delta u_{x} + K_{x0} \Delta u_{y} \\ \Delta \phi_{x} &= K_{y0} \Delta \theta_{z} - \frac{d\Delta \theta_{z}}{ds} - \psi_{z0} \Delta \theta_{y} \\ \Delta \phi_{y} &= -K_{x0} \Delta \theta_{z} + \frac{d\Delta \theta_{y}}{ds} - \psi_{z0} \Delta \theta_{z} \\ \Delta \theta_{y} &= \frac{d\Delta u_{x}}{ds} - \psi_{z0} \Delta u_{y} + K_{y0} \Delta u_{z} \\ \Delta \theta_{x} &= -\left(\frac{d\Delta u_{y}}{ds} - K_{x0} \Delta u_{z} + \psi_{z0} \Delta u_{x}\right) \\ \Delta \psi_{z} &= \frac{d\Delta \theta_{z}}{ds} + K_{x0} \Delta \theta_{y} + K_{y0} \Delta \theta_{x} \\ \frac{d\Delta \psi_{z}}{ds} &+ \frac{1}{EI_{\omega}} \Delta M_{\omega} = 0 \qquad (2.a \sim 2.g) \end{aligned}$$

3. 離散的一般解

本研究においては,基礎微分方程式の積分方程式へ の変換と積分方程式の近似解法の応用とにより,曲線 部材軸等分割点における基礎微分方程式の離散的な一 般解を求めることとする.

まず、曲線部材の支間、軸長、断面の基準断面積お よび基準断面二次モーメントを各々、L、 ℓ 、 A_0 、 I_0 また、軸線座標をsとして、次のような無次元化を行 う.

上記の無次元量 X_t および無次元座標 η を導入する ことにより、増分形基礎微分方程式 (1. $a \sim 1.g$) および (2. $a \sim 2.g$) は、次のごとく整理縮小され る.

$$\frac{dX_t}{d\eta} = \nu \sum_{k=1}^{15} G_{tk} X_k (t = 1 \sim 14, X_{15} = 1)$$
(3)

ここに、 $\nu = \ell / L$, G_{tk} は増分断面力および増分変

位の係数である。(Appendix 参照)

座標原点を部材左端にとり,式(3)を変域[0, η] で積 分すれば,次の積分方程式が得られる。

 $X_{t}(\eta) = X_{t}(0) + \int_{0}^{\eta} \nu \sum_{k=1}^{15} G_{tk}(\xi) \cdot X_{k}(\xi) d\xi \qquad (4)$

積分方程式(4)に、等間隔の数値積分法 (Simpson の 多分割数値積分法)を繰り返し適用することにより、 部材をm等分した場合の分割点iにおける X_i の離散 的な一般解が求められ、次式となる。

$$X_{ti} = \sum_{n=1}^{15} d_{tni} X_{no} (i = 1 \sim m, X_{150} = 1)$$
(5)

ここに、Xno: 左支点の状態量を表わす積分定数。

$$d_{tni} = \delta_{nt} + \sum_{j=0}^{i} \sum_{k=1}^{15} a_{ij} G_{tkj} d_{knj}$$

$$\delta_{nt} : \mathcal{I} \square \lambda , \forall \mathcal{D} - \mathcal{O} \vec{\mathcal{T}} \mathcal{V} \mathcal{I}, \quad a_{ij} : \lambda_{ij} / 24m$$

λ₁: 積分公式の重み係数

次に、軸ひずみ、曲率の変化量を材料非線形性を考 慮して、断面力の増分量で表わす。平面保持の仮定よ り、断面内任意点の軸ひずみ $\Delta \epsilon$ は、図心からの距離を それぞれx、yとすると、次式にて考えられる。

 $\Delta \varepsilon = \Delta \varepsilon_{0} + \Delta \phi_{x} y - \Delta \phi_{y} x + \omega \phi_{z}$ (6) ここに、*ω*:そり関数 また、断面力は、次のごとく表わせる。 $\Delta Q_{z} = \int \Delta \sigma dA, \Delta M_{x} = \int \Delta \sigma \cdot y dA,$

$$\Delta M_y = -\int \Delta \sigma \cdot x dA, \ \Delta M_\omega = \int \Delta \sigma \cdot \omega dA$$

したがって,(6)式のごとく書き表わす.

$$\begin{pmatrix} -X_{3} \\ -X_{4} \\ -X_{5} \\ -X_{7} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a^{2} \bar{A} \gamma_{1} & \bar{I}_{x} \gamma_{5} & -\bar{I}_{x} \gamma_{8} & \bar{I}_{\omega} \gamma_{10} \\ \bar{I}_{x} \gamma_{5} & \bar{I}_{x} \gamma_{2} & -\bar{I}_{x} \gamma_{6} & -\bar{I}_{\omega} \gamma_{9} \\ -\bar{I}_{x} \gamma_{8} & -\bar{I}_{x} \gamma_{6} & \bar{I}_{y} \gamma_{3} & \bar{I}_{\omega} \gamma_{7} \\ -\bar{I}_{\omega} \gamma_{10} & \bar{I}_{\omega} \gamma_{9} & -\bar{I}_{\omega} \gamma_{7} & -\bar{I}_{\omega} \gamma_{4} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Delta \varepsilon_{0} \\ \Delta \phi_{x} \\ \Delta \phi_{y} \\ \Delta \phi_{z} \end{pmatrix}$$
(6)

ただし,

$$a = \sqrt{\frac{A_0}{I_0}L}, \ \bar{A} = \frac{A}{A_0}, \ \bar{I}_x = \frac{I_x}{I_0}, \ \bar{I}_y = \frac{I_y}{I_0}, \ \bar{I}_w = \frac{I_w}{I_{w0}}$$
$$\gamma_1 = \frac{\int EdA}{EA}, \ \gamma_2 = \frac{\int Ey^2 dA}{EI_x}, \ \gamma_3 = \frac{\int Ex^2 dA}{EI_y}$$
$$\gamma_4 = \frac{\int Ew^2 dA}{EI_w}, \ \gamma_5 = \frac{L \int Ey dA}{EI_x}, \ \gamma_6 = \frac{\int Exy dA}{EI_x}$$
$$\gamma_7 = \frac{L \int Ew x dA}{EI_w}, \ \gamma_8 = \frac{L \int Ex dA}{EI_x}, \ \gamma_9 = \frac{L \int Ew y dA}{EI_w}$$
$$\gamma_{10} = \frac{L^2 \int Ew dA}{EI_w}$$

この(6)式より、 $\Delta \varepsilon_0$ 、 $\Delta \phi_x$ 、 $\Delta \phi_y$ 、 $\Delta \phi_z$ を求めると

$$\begin{pmatrix} \Delta \varepsilon_{0} \\ \Delta \phi_{x} \\ \Delta \phi_{y} \\ \Delta \phi_{y} \\ \Delta \phi_{z} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \beta_{11} & \beta_{12} & \beta_{13} & \beta_{14} \\ \beta_{21} & \beta_{22} & \beta_{23} & \beta_{24} \\ \beta_{31} & \beta_{32} & \beta_{33} & \beta_{34} \\ \beta_{41} & \beta_{42} & \beta_{43} & \beta_{44} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -X_{3} \\ -X_{4} \\ -X_{5} \\ -X_{7} \end{pmatrix}$$
(8)

4. 複合非線形問題

材料非線形性の導入にあたって、本解析で用いた主 な仮定は次のとおりである.

- ①材料は完全弾塑性体である。また、除荷は起こらないものとする。
- ②弾塑性域において、平面保持の法則が成立する。 断面内の非弾性域の拡大に伴う剛性の低下率等は 断面細分割法によって求めることとする。
- ④断面を微小要素に分割した場合,弾塑性域における伸び剛性,曲げ剛性および曲げねじり剛性は, 弾性域内にある要素のみ有効であるとし,St. Venantのねじり剛性は,弾塑性域内で全断面有効とする。
- ⑤断面の各要素の降伏は、直ひずみのみで決定する ものとする。
- また,断面細分割法ご計算手順は次に示すとおりで ある. (Fig. 2)
 - 1) 部材断面を微小長方形要素に分割する.
 - 各荷重増分段階において、断面の微小要素に生じる Δε を(6)式より算定する.
 - 3)残留ひずみ ε_r と増分ひずみ Δε を重ね合わせる.

$$\boldsymbol{\varepsilon} = \boldsymbol{\varepsilon}_r + \boldsymbol{\varDelta}\boldsymbol{\varepsilon} \tag{9}$$

4) Von Mises の降伏条件式より,降伏の判定を行う.

$\varepsilon < \varepsilon_y$:弾性域	(10. a)
$\varepsilon \ge \varepsilon_y$:塑性域	(10. b)

5) (10. a) の場合は,弾性域内の剛性を与え, (10. b)の場合は,剛性を零とおき,剛性の低下 率を計算する.



Fig. 2 Stress-Strain Relation and Section Divided into Finite Elements.





Fig. 5 Load-Strains at Flange Tips Relation of Curved Beam.



Fig. 6 Load-Displacement Relation.



Fig. 7 Load-Strains at Flange Tips Relations of Curved Beam.

この方法により,任意の応力-ひずみ関係あるいは 残留応力分布を考慮することができる.

5. 数値計算例

薄肉曲線 I 形ばりの複合非線形問題に関する本解析 法と,既往の理論値および実験値との比較を行う.

供試体は、両端単純支持で部材軸中央に単一集中荷 重が作用する曲線ばりである。(Fig. 3)供試体の諸寸 法および材料定数は、Table.1に示すとおりである。

Table. 1	Dimensions,	Curvature	and Mate	rial
	Constant of	Analytical	Models.	

	$R(\mathrm{cm})$	<i>b</i> (cm)	<i>h</i> (cm)	<i>t</i> (cm)		<i>w</i> (cm)	
B - 1	350.0	10.06	25.01	0.84		0.55	
B-2	425.0	10.06	25.18	0.83		0.57	
B-3	700.0	10.09	25.04	0.83		0.56	
	<i>L</i> (cm)	<i>d</i> (cm)	E (kg/d	kg/cm²)		$\sigma_{y}(\mathrm{kg/cm^{2}})$	
	280.0	15.0	2.1×10 ⁶		3200.0		

Fig. 4 は、B-1の荷重とスパン中央における断面 回転角 θ_z との関係を示している.非弾性域の発生に 伴って生じる断面二次そりモーメント ($I_{\omega x}, I_{\omega y}$)パラ メータを考慮せず解析した場合を、Author 1 とし、考 慮した場合を Author 2 として、福本ら¹⁰⁾の実験値お よび理論値との比較を行った。図中の〇内は、各荷重 段階におけるスパン中央部での非弾性域の拡がりを表 わしている。

また, Fig. 5 は、荷重とスパン中央断面の上フラン ジのひずみとの関係を示したもので、実験値および薄 木ら⁸⁾の解析値との比較を行った。

同様に、曲率が異った供試体B−2、B−3の場合 についての解析結果をFig. 6, Fig. 7 に示した。

これらの図より,実験値と解解析値とは,終局耐荷 力および変形挙動において,若干の差が生じているが, 良好な傾向が得られ,本解析法の有効性が認められる.

6.結論

幾何学的および材料非線形性を考慮し,増分形微分 方程式の離散的一般解に基づく,直接的かつ半解析的 解法を提示し,薄肉曲線 I 形ばりの複合非線形解析を 行った.本解析値との既往研究との比較を行った結果, 本解析法の妥当性が認められた.

この離散的一般解を用いることにより,直線要素集 合体や円弧要素集合体などの置換系へのモデル化を要 せず,直接的に解析できる.また,任意の支持条件, 荷重条件のもとで,任意の軸線形状,断面形状および 残留応力を有する薄肉曲線ばりの複合非線形解析が可 能である.

参考文献

- 吉田 博・井本芳宏:拘束をうけるはりの弾性および非弾性横倒れ座屈解析,土木学会論文報告集, 第208号, pp. 1~12, 1972年
- 2)吉田 博: プレートガーダーの非弾性横倒れ座屈 強度,土木学会論文報告集,第220号,pp.1~8, 1973年
- 3)青島泰之: 圧延H型鋼ばりの横だおれ座屈公式,
 土木学会論文報告集,第267号,pp.1~8,1977年
- な農知徳・大島 久・新山 惇:曲線桁橋の構造 特性について、土木学会論文報告集、第194号、 pp21~28、1971年
- 5) Vlassov, V. Z (奥村敏恵ほか共訳): 薄肉弾性ば りの理論, 技報堂, 1967年
- 6) 薄木征三・稼農知徳・渡辺 昇:有限なねじれを 考慮した薄肉曲線部材の変形解析,土木学会論文報 告集,第290号, pp.1~15,1979年.
- 7)渡辺 昇・稼農知徳・薄木征三:薄肉曲線桁の変 位場に基づく有限ねじれ変形解析,土木学会論文報 告集,第317号,pp.31~45,1982年.
- 8)長谷部 薫・薄木征三:薄肉 I 形曲線桁の非弾性
 挙動について、土木学会第39回年次講演会概要集、
 I 64、P 127~128、1984年。
- 9)西田 進・福本 咳士:はりの横倒れ座屈挙動に関する一簡易算定法、土木学会論文報告集、第328号、 pp.11~18、1982年。
- Fukumoto, Y. and S. Nishida : Ultimate load Behavior of Curved I-Beams, ANCE, Vol. 107, No. EM2, April, 1981.
- 前川幸次・吉田 博:伝達マトリックス法による 曲線 I 形ばりの耐荷力解析,土木学会論文報告集, 第312号,pp.22~37,1981年.
- 12) 吉田 博・前川幸次:薄肉開断面曲線ばりの弾塑 性解析について,土木学会第34回年次講演会概要集, I-105, p208~209, 1979年.
- 前川幸次・吉田 博:曲線 I 形ばりの耐荷力曲線
 について、土木学会第35回年次講演会概要集、I
 -126、pp.249~250、1980年。
- 14) 若菜啓孝・崎山 毅:鋼リブアーチの面外耐荷力 解析,第9回構造工学における数値解析法シンポジ ウム論文集,pp.203~208,1985年。

[Appendix]

 $G_{12} = \phi_{z0}, \ G_{13} = -K_{y0} + Q_z \beta_{31}, \ G_{14} = Q_z \beta_{32},$ $G_{15} = Q_z \beta_{33}, \ G_{17} = Q_z \beta_{34},$ $G_{18} = Q_y, \ G_{110} = -\bar{P_z}, \ G_{111} = \bar{P_y},$ $G_{115} = \Delta p_x + \Delta \psi_z \Delta Q_y - \Delta Q_z H_2,$ $G_{21} = -\psi_{z0}, \ G_{22} = K_{x0} - Q_z \beta_{21}, \ G_{24} = -Q_z \beta_{22},$ $G_{25} = -Q_z \beta_{23}, \ G_{27} = -Q_z \beta_{24},$ $G_{28} = -Q_x, \ G_{29} = \bar{P}_z, \ G_{211} = \bar{P}_x,$ $G_{215} = \Delta p_y - \Delta \psi_z \Delta Q_x + \Delta Q_z H_1,$ $G_{31} = K_{y0}, G_{32} = -K_{x0}, G_{33} = -Q_x \beta_{31} + Q_y \beta_{21},$ $G_{34} = -Q_x \beta_{32} + Q_y \beta_{22},$ $G_{35} = -Q_x \beta_{33} + Q_y \beta_{23}, \ G_{37} = -Q_x \beta_{34} + Q_y \beta_{24},$ $G_{39} = -\bar{P}_y, \ G_{310} = \bar{P}_x,$ $G_{315} = \Delta p_z + \Delta Q_x H_z - \Delta Q_y H_1$ $G_{42} = 1.0, G_{43} = M_z \beta_{31}, G_{44} = M_z \beta_{32},$ $G_{45} = \phi_{z0} + M_z \beta_{33}, \ G_{46} = -K_{y0},$ $G_{47} = M_z \beta_{34}, \ G_{48} = M_y, \ G_{415} = -\Delta M_z H_2 + \Delta \psi_z \Delta M_y,$ $G_{51} = -1.0, \ G_{53} = -M_z\beta_{21}, \ G_{54} = -\psi_{z0} - M_z\beta_{22},$ $G_{55} = -M_z \beta_{23}, \ G_{56} = K_{x0},$

 $G_{57} = -M_z \beta_{24}, \ G_{58} = -M_x, \ G_{515} = -\Delta M_z H_1 - \Delta \psi_z \Delta M_x,$ $G_{63} = -M_x\beta_{31} + M_y\beta_{21}, \ G_{64} = K_{y0} - M_x\beta_{32},$ $G_{65} = -K_{x0} - M_x \beta_{33} + M_y \beta_{23},$ $G_{67} = -M_x \beta_{34} + M_y \beta_{24}, \ G_{615} = \Delta M_x H_2 - \Delta M_y H_1,$ $G_{76} = I_0 / I_{\omega 0}, \ G_{78} = J_0 / I_{\omega 0},$ $G_{83} = -\beta_{41}, G_{84} = -\beta_{42}, G_{85} = -\beta_{43}, G_{87} = -\beta_{44},$ $G_{93} = -\beta_{21}, \ G_{94} = -\beta_{22}, \ G_{95} = -\beta_{23},$ $G_{97} = -\beta_{24}, \ G_{910} = \phi_{z0}, \ G_{911} = -K_{y0},$ $G_{103} = -\beta_{31}, G_{104} = -\beta_{32}, G_{105} = -\beta_{33},$ $G_{107} = -\beta_{34}, \ G_{109} = -\psi_{z0}, \ G_{1011} = K_{x0},$ $G_{118} = 1.0, \ G_{119} = K_{y0}, \ G_{1110} = -K_{x0},$ $G_{1210} = 1.0, \ G_{1213} = \phi_{z0}, \ G_{1214} = -K_{y0},$ $G_{139} = -1.0, \ G_{1312} = -\psi_{z0}, \ G_{1314} = K_{x0},$ $G_{143} = -\beta_{11}, \ G_{144} = -\beta_{12}, \ G_{145} = -\beta_{13}, \ G_{147} = -\beta_{14}$ $G_{1412} = K_{y0}, \ G_{1413} = -K_{x0},$ $H_1 = -\beta_{21} \Delta Q_z - \beta_{22} \Delta M_x - \beta_{23} \Delta M_y - \beta_{24} \Delta M_\omega$ $H_2 = -\beta_{31} \Delta Q_z - \beta_{32} \Delta M_x - \beta_{33} \Delta M_y - \beta_{34} \Delta M_\omega$ other $G_{tk} = 0.0$